

4.豪雪・少雪の記録



1 主な豪雪の記録

上越地方は、過去幾度となく豪雪に見舞われた。

雪おろしの重労働、機械化、そして克雪へ……………

昭和

2豪雪

高田市では積雪が最深3.7メートル、東頸城郡の大島村では平地で7.5メートルにも及んだ。

20豪雪

この年は3メートルを超える積雪が1月の中旬から3月の中旬まで、ドッカーリと腰をおろしていた。

38豪雪

38年1月16日から1月25日まで新潟県下に続いた異常な里雪は長岡で積雪318cm、妙高で255cm、高田で148cmと典型的な里雪型となった。

56豪雪

55年12月中旬から年末にかけて大雪。山間部は、積雪が200～300cmに達した。年明けも大寒波襲来が続き2月下旬にまた大雪。

59豪雪

2月16日高田で積雪314cmを記録。3月上旬に再び大雪で、三俣で積雪が470cm、妙高で450cmを記録。

60豪雪

12月下旬から1月下旬まで大雪が続き、高田は、1月30日で298cmの積雪を記録。一転、2月は高温で大雪はなかった。

61豪雪

12月より大雪が続き、高田で積雪が324cmと戦後最高を記録。2月も寒さが続いた、里雪型の豪雪。

平成

18豪雪

12月に記録的な大雪となった。旧高田市街では20年ぶりの一斉屋根雪下ろしが行われた。

平成

24豪雪

上越市内の観測所5箇所積雪が4mを越え、28箇所で2mを越えた。2月10日、高田観測所で積雪209cmを記録。

豪雪の被害

伝/説/の/豪/雪

昭和2年2月13日の「県気象報告」による板倉町寺野（旧寺野村）の積雪記録。なんと8メートル18センチ！！



2 豪雪

【豪雪の主な被害状況】

豪雪の記録を振り返るとき、必ず触れなければならないのが昭和2年の豪雪である。この年の特徴は1月中旬頃までは少雪であったのに、その後突如として大雪に見舞われたことである。1月24日には新井で九尺二寸（約270cm）を記録している。雪は2月に入っても降り続き、2月9日には176cmという日降雪量としては高田測候所史上1位の大雪を観測した。3月に入っても雪の勢いは衰えず、3月1日に高田では一丈一尺三寸（約3m30cm）の積雪があったという。雪は市民生活にも大きな影響を与えた。家屋の倒壊が相次ぎ、市街地・村落を問わず人々は除雪に明け暮れた。鉄道は1月下旬から不通となっている。また上越地方の各地で雪崩の被害が相次いだ。



20豪雪

【豪雪の主な被害状況】

昭和20年の豪雪は、冬期間全体を通して雪が多かったことが特徴的である。高田測候所の記録によると、1月14日から3月18日まで積雪3m以上の日が60日以上も続き、1月24日には最深積雪373cmを記録、さらに2月26日には377cmを記録している。また雪による被害は戦中のこの時期にさらに拍車をかけて広がった。新潟県内各地で鉄道の不通、雪崩が起きている。またこの豪雪は東北地方で、3月から4月にかけて融雪による大水を引き起こし、農作物に大きな被害をもたらしたことも特徴的である。



38豪雪

【豪雪の主な被害状況】

38豪雪は、典型的な里雪型と言われ、中・下越地方で多くの降雪をもたらした。1月16日から1月25日までに妙高で255cm、高田で148cm、長岡では318cmの積雪を記録している。このため国道、鉄道も不通となり、新潟県内は完全に孤立してしまった。鉄道の復旧に見込みがたたず、道路を確保して生活物資を搬入することになった。除雪機械として全国からブルドーザが集められ、また自衛隊及び青年開発隊が送り込まれる等の騒ぎとなったことで、豪雪が災害として認識され、国を挙げて道路除雪の重要性を認識することとなった。

38豪雪は、除雪機械の開発や防雪施設等が急速に整備される契機となり、後に除雪元年と言われた。



56豪雪

【豪雪の主な被害状況】

56豪雪は、暖冬・冷夏といわれ比較的雪の少なかった52～55年から一転、この地方が豪雪地帯であることを再確認させるに十分だった。年明けから元日に降り出した雪は息つくひまもなく、17日まで連続2週間降り続いた。19日には中越地区で大規模な雪崩が発生し、老人ホームにいた6人が犠牲になっている。その後も雪は止むことを知らず高田測候所の記録では、1月24日を除き毎日降雪があったと記録されている。また、2月下旬から3月上旬にかけても猛烈な寒波におそわれ、雪が小康状態になったのは3月も半ばを過ぎてからであった。



59豪雪

【豪雪の主な被害状況】

11月27日には早くも高田で初雪を記録した59豪雪は、12月中旬から本格的な雪が降り始め、妙高では12月16日から21日までの6日間に累計降雪深が471cmに達するなど、12月中としては記録的な大雪となった。年末・年始にかけて一段落したかにみえたものの、1月に入って再び活発に降り出し、3月上旬まで断続的に続く大雪となった。この大雪のなか、それまで旧18号沿線住民には大きな問題となっていた屋根雪おろしと国道除雪は、上新バイパスの完成により幹線国道として機能が十分に発揮されバイパス建設の効果が確認された豪雪でもあった。



60豪雪

【豪雪の主な被害状況】

「2年続きの豪雪はない・・・」と言われてきた気象予報も見事にはずれ、59豪雪からの2年続きの大雪となった。60豪雪で特徴的なのは、12月下旬から1月下旬のほぼ一ヶ月間に、海岸・平野部を中心にドカ雪となったことである。12月30日には高田で240cm・中郷で305cmの積雪となり、上越市内では12月29日早くも市街地の一斉屋根雪下ろしを行っている。年が明け、1月上旬から降り続いた雪は上越地方に大雪をもたらし、上越市周辺の5市町村に災害救助法が適用された。



61豪雪

【豪雪の主な被害状況】

雪には慣れているはずの人々も「もうたくさん」といった、3年続きの大雪の締めくくりは大変なドカ雪であった。前年の12月初旬から積雪を記録し、1月11日には24時間降雪量としては戦後最高となる140cmを記録した。各所で交通網は寸断され、海・空・鉄道の各便は欠航・運休が相次ぎ、道路においても11日から13日まで国道18号も全面通行止めとなっている。また1月27日には能生町柵口地区で大規模雪崩が発生、13人が犠牲となったことは記憶に新しい。2月6日には高田測候所において戦後第1位となる積雪324cmの記録を観測している。59・60・61の豪雪は3年連続で250cmをこえる積雪となり過去に前例のない記録となった。



平成 18 豪雪

【豪雪の主な被害状況】

雪の降り始めが早く、各地で顕著な低温となったため、日本海側で12月としては記録的な大雪となった。12月～1月上旬にかけて山沿いを中心に断続的に雪が続く荒れ模様となり、高速道路をはじめ陸、海、空の交通機関で欠航や運休が相次いだ。妙高高原観測所では12月の累計降雪量が過去最高を記録し、また高田測候所では、12月18日に積雪70cmを記録した。12月としては1985年（昭和60年）豪雪以来の積雪量となり、妙高市と上越市で自衛隊による災害派遣活動が実施された。旧高田市街では20年ぶりに一斉屋根雪下ろしが行われ、上越消流雪用水導入施設の運転も実施された。



平成 24 豪雪

【豪雪の主な被害状況】

1月から冬型の気圧配置が断続的に続いたことで北陸地域の日本海側を中心に広範囲で大雪となり、新潟県上越・中越地方では各地で積雪が3mを越え、2月4日までに9市3町に対して災害救助法が適用された。上越市内34箇所の積雪観測地点のうち5箇所で積雪は4mを越え、28箇所で2mを越えた。2月10日には高田観測点で26年ぶりに積雪深209cmを記録し、大雪警報が発令された。また今冬は冷え込みも厳しく、新潟地方気象台によると、寒の入りの1月6日の日中の最低気温は、上越市高田で氷点下1.7度、妙高市関山で氷点下4.4度を記録した。

4 豪雪の記録写真



車道が雪の山になっても、人々の足を確保してくれる雁木。

—本町2丁目 昭和59年2月—



人の背丈よりも高く積もった屋根雪おろし。



連日の雪に立ち向かう人々。
—南本町2丁目 昭和59年12月—

4.豪雪・少雪の記録



歩道に降り積もった雪を
車道と歩道の境に
積み上げると壁のように。

—妙高市 平成18年2月—



自衛隊による災害派遣活動
によって、雪に埋もれた
家屋の除雪作業がすすめられた。

—妙高市 平成18年2月—



旧高田市街では、
周辺の車両規制を行い
一斉屋根雪下ろしが
行われた。

—上越市南本町 平成24年2月—

5 令和2年少雪の記録

1年で最も寒さが厳しいとされる「大寒」を過ぎても、上越地方は記録的な暖冬・少雪となった。上越市高田では、12月1日から1月20日までの降雪量がわずか6cmしかなく、1月～3月の降雪量の合計も観測史上最も少なかった。平年1月には100cmほどの積雪を観測する妙高市関山でも1月14日の積雪はゼロであった。2月までほとんど降雪がなく、まとまった降雪は2月上旬のみとなった。また、1月～3月の平均気温は5.4度と、統計開始以来最も高い記録となり、記録づくめの暖冬となった。今冬の少雪は、スキー場の営業中止や冬期イベントの中止など雪国の経済活動に大きな打撃を与えた。



センター試験会場へ向かう受験生。例年は大雪となる試験当日にも積雪はない。

－上越市 令和2年1月－

上越市金谷山で開催される「レルヒ祭」。少雪のため一部イベントの中止も。

－上越市 令和2年2月－

